

誤解の詩学

松本 肇

一 典故の誤用

中国の詩人は、詩を作るときに典故を用いることが多い。典故を上手に用いると、詩の表現効果が高められる。ところが、中には典故の用い方を誤る例も見られる。宋・魏慶之『詩人玉屑』巻七の「誤用事」に引く、宋・蔡條『西清詩話』では、そのような例を三つ挙げている。

唐代の人は詩を専門の学問にしているが、世間に評判が高く故事の使い方の上手なものでも、小さな誤りを犯すことがある。例えば、王維（字は摩詰）の詩に、「衛青の敗れざるは天幸に由り、李広の功無きは数奇に縁る」という。「敗れざるは天幸に由る」とは、霍去病についていったもので、衛青のことではない。霍去病の伝記を見ると、その軍について、かつて「先の大將軍、軍亦天幸有り、未だ嘗て困絶せず。」と言っている。きつと、「大將軍」の字があるので、霍去病というべきところを誤って衛青としたのだ。李白（字は太白）の詩に、「山陰の道士如し相訪わば、為に黄庭を写して白鵝に換えん。」とあるのは、『道德経』の

ことで、『黄庭経』ではない。王羲之（字は逸少）はかつて『黄庭経』を写して王修に与えたことがあるので、二つの故事を混同したのだろう。杜牧の誤りは数えきれない。先輩がいつも言っている、故事を用いるには、心と目ではつきり分かつて、必要なときに調べて確かめなければならない、そうすればしつかり覚えて誤りを犯さない、と。まことに名言である。

唐人以詩為専門之学、雖名世善用故事者、或未免小誤。如王摩詰詩、「衛青不败由天幸、李広無功緣数奇。」「不败由天幸」、乃霍去病、非衛青也。去病伝云、其軍嘗「先大將軍、軍亦有天幸、未嘗困絶。」意有「大將軍」字、誤指去病作衛青耳。李太白「山陰道士如相訪、為写黄庭換白鵝。」乃道德經、非黄庭也。逸少嘗写黄庭経与王修、故二事相紊。杜牧之尤不勝数。前輩每云、用事雖了在心目間、亦当就時討閱、則記牢而不誤、端名言也。

最初の例に引かれた王維の詩は、「老将行」（趙殿成『王右丞集箋注』卷六）と題する古詩の一節。衛青將軍が敗れなかったのは、天の与えた幸運によるもので、李広將軍に戦功がなかったのは、幸運に恵まれなかったためだ、の意。衛青と霍去病の伝記は、『史記』卷一一一では、「衛將軍驃騎列伝」として収められている。衛青は大將軍、霍去病は驃騎將軍と呼ばれ、ともに匈奴征伐で活躍した。王維が詩に用いた「天幸」ということは、霍去病の伝記に見えるので、「去病の敗れざるは天幸に由る」というのが正しい。ところが、伝記に「大將軍」という字があったために、衛青のことだと誤解した、というのが『西清詩話』の意見である。ちなみに、衛青と霍去病の伝記は、『漢書』卷五十五では、「衛青霍去病伝」として収められ、ここでは「大將軍」ではなく「大軍」となっている。したがって、『西清詩話』の意見が正しければ、王維は『漢書』ではなく『史記』を読み誤ったことになる。「李広の功無きは数奇に縁る」は、『史記』卷一〇九の「李將軍列伝」に基づく。こちらに誤りはない。

王維の誤解は、いったい何を物語るだろうか。王維は果たして、「大將軍」という字に惑わされて、衛青と霍

去病を間違えたのだろうか。恐らく、そうではないと思う。衛青と霍去病の伝記は、『史記』でも『漢書』でも一緒に収められて、ともに匈奴征伐で戦功を上げた將軍という共通のイメージが定着していた。したがって、「大將軍」「天幸」という字の有無にかかわらず、どちらの名前を用いてもよかつたのである。衛青と霍去病の両者は一体の關係にあり、唐代の人々はそれほど区別を意識しないで、この二人の將軍を詩に詠じていたのである。その証拠に、衛青と霍去病を間違えたのは、王維だけではない。宋・王楙『野客叢書』卷五の「高適詩誤」では、高適が同様の誤りを犯した例を引いている。高適の「送渾將軍出塞」(『高常侍集』卷五)に、「李広従来先將士、衛青未肯学孫吳(李広 従来 將士を先にし、衛青 未だ肯えて孫吳を学ばず)」という。この句について、王楙は次のように述べる。

『漢書』を調べると、「孫吳の兵法」を学ばなかつたのは、霍去病であり、衛青ではない。この詩もやはり王維と同じで、霍去病の故事を衛青に用いたのである。思うに、衛青と霍去病は同時に將軍となり、二人の伝記は似ているので、誤って引用することが多いのだろう。

按『漢書』、不学「孫吳兵法」乃霍去病、非衛青也。此詩亦与王維同、是亦以去病事為衛青用。蓋衛、霍同時為將、而二伝相近、故多誤引用之。

孫武・呉起の兵法を学ばなかつたというのは、霍去病の伝記に見える。ところが、高適はそれを衛青と勘違いした。王維も高適も、衛青と李広を対にして詠じ、李広については誤解せず、衛青の方だけ誤解しているのは、恐らく偶然ではない。王楙のいう通り、衛青と霍去病の伝記が似ていたので、両者を混同したのである。そして、あえて言えば、混同したとしても、詩の表現効果には影響を与えない。つまり、典故の誤用は、詩人にとって致命的な欠陥ではないということだ。

二つ目の李白の詩については、多くの議論があるので、後に改めて取り上げる。三つ目の杜牧(字は牧之)の

誤りについては、『詩人玉屑』巻七の「失事実」に引く宋・范正敏『遜齋閑覽』が、「過華清宮絶句三首」其一（『樊川文集』巻二）を例に挙げてゐる。華清宮は、驪山（西安市臨潼区）の麓にあつた離宮。もと温泉宮といい、玄宗皇帝がしばしば訪れた。

長安廻望繡成堆 長安 廻望すれば 繡 堆を成す

山頂千門次第開 山頂 千門 次第に開く

一騎紅塵妃子笑 一騎 紅塵 妃子笑う

無人知是荔枝來 人の是れ荔枝の來を知る無し

長安から眺めると、錦の刺繡を施したような美しい山がそびえている。山頂の多くの門が次々に開いた。馬に乗った兵がひとり、赤い塵の中に現われると、后妃がにっこり笑う。これが荔枝を運んできたのだと、誰も知らない。

右の詩を引いて、『遜齋閑覽』で次のように述べている。

この詩は、とりわけ人口に膾炙している。唐の歴史によれば、明皇は十月に驪山に行幸し、春には宮殿に帰っている。つまり、六月に驪山にいたことではないのである。それから、荔枝は真夏に熟するので、言葉と内容は素晴らしいけれども、事実と違っている。

尤膾炙人口。批唐紀、明皇以十月幸驪山、至春即還宮、是未嘗六月在驪山也。然荔枝盛夏方熟、詞意雖美、而失事実。

玄宗が華清宮に滞在する時期は冬なので、夏の果物である荔枝を運ぶわけがない、というのである。玄宗が冬

に華清宮（温泉宮）を訪れていることは、『旧唐書』卷八・九、玄宗本紀などで確かめられる。ところが、これには反論がある。宋・程大昌『攷古編』卷八は、反論の根拠のひとつに、荔枝香という曲の由来を挙げている。それによると、天宝十四載六月一日、楊貴妃の誕生日に玄宗は驪山に行幸し、音楽家に新曲を作らせた。ちょうど、南海から荔枝を献上したので、それにちなんで荔枝曲と名づけたという。つまり、夏の六月に驪山に行幸したという記録がある。また、次のようにも述べている。

『開元遺事』によると、玄宗皇帝と楊貴妃は、七月七日の夜になるといつも華清宮で宴会を行ったという。

白楽天の「長恨歌」にも、「七月七日 長生殿、夜半 人無く 私語の時」と言っている。だとすれば、杜牧之の詩は意外にも当時の真実を伝えたことばということになる。世間の人は唐の歴史書の記載だけを見て、すぐに歴史書にないものは伝聞で真実を伝えているか疑わしいと思う。いちばんよくないことだ。

『開元遺事』、帝与妃每至七月七日夜在华清宮游宴。而白乐天「長恨歌」亦言「七月七日長生殿、夜半無人私語時」、則知杜牧之詩、乃当时伝信語也。世人但見唐史所載、遽以伝聞而疑伝信、最不可也。

『開元遺事』は、後周・王仁裕の『開元天宝遺事』のことで、右の記事は、卷三「蛛糸卜巧」に見える。長生殿は、華清宮にある宮殿の名前。玄宗は七夕の夜にも華清宮を訪れている。程大昌は、玄宗が華清宮を訪れたのは冬だけではないということを証明しようとしている。言い換えれば、杜牧の詩が事実に基づいていることを証明しようとしている。『遯齋閑覽』に反論しているけれども、詩は事実を写すものである、という見方は変わらない。程大昌の『攷古編』は、清・馮集梧『樊川詩集注』卷二に引かれている。

竹村則行「楊貴妃の笑い——杜牧「一騎紅塵妃子笑」詩について——」（『楊貴妃文学史研究』、研文出版、二〇〇三）は、「過華清宮絶句」が三首の連作であることに注目し、楊貴妃の笑いについて分析している。竹村氏によれば、楊貴妃の笑いは、好物の荔枝を手にした「満足の笑い」というだけでは不十分で、そこには「亡国

の笑い」が含まれるという。周の幽王は、皇后の褒姒を笑わせるために、戦争の合図の太鼓を何度も打って、兵士を集めた。戦争がないときにも、太鼓を打ったので、本当に戦争が起きたとき、兵士はうそだと思つて集まらず、幽王は驪山の麓で殺された。褒姒の笑いが、国を滅ぼしたのである。『史記』巻四・周本紀などに見える、この話の褒姒の笑いを、楊貴妃の笑いと重ねることによって、竹村氏は杜牧の詩の諷刺性を強調する。諷刺性という観点から見ると、楊貴妃ひとり喜びをさせるために、暑い時期に華清宮まで荔枝を運ばせる玄宗の行為を描くことによつて、杜牧はその目的を達している。華清宮と荔枝の組み合わせが、諷刺の効果を上げている。そのことが大切なのであつて、事実に基づいているかどうかの議論は、詩の本質と何の関係もない。

二 誤解する権利

次に、李白の例を見ることにする。李白の詩は、「送賀賓客帰越」（『李太白全集』巻十七）の一節。賀知章が越に帰るのを送別した詩で、もしも山陰（浙江省紹興市）の道士が訪れてきたら、『黄庭経』を写して白い鷺鳥と取り換えるだろう、の意。『李太白全集』では、「訪」は「見」、「為」は「応」になっている。『西清詩話』の説に従えば、李白の句は、王羲之が山陰の道士の求めに応じて、『道德経』を写し、好きな鷺鳥と取り換えた、という故事に基づく。『晋書』巻八十・王羲之列伝に見える話である。賀知章が草書と隸書に巧みだったので、書聖と呼ばれる王羲之になぞらえて、このように言った。『晋書』によれば、王羲之が写したのは『道德経』で、『黄庭経』ではない。したがつて、典故の誤用である、というのが『西清詩話』の意見である。ところが、これにも反論がある。宋・洪邁『容齋隨筆』容齋四筆巻五で、次のように述べている。

李太白の詩に、「山陰の道士 如し相見なば、まさ 応に黄庭を写して白鷺に換うべし」と言う。思うに、王羲之の故事を用いたのだから。昔のある賢人は議論して、「王羲之は道德経を写し、道士は鷺鳥の群れをみな

贈った」と言う。もともと『黄庭経』ではなく、李太白の誤りと見なしている。私は、李太白の見識は世界にすぐれ、口を突いて美しい言葉が出来上がるのだと思う。きつと、細かいことにとらわれ、また『晋書』を調べて、王羲之の伝記を読み、その後で書き始めるのではない。たとえ『道德経』を『黄庭経』と間違えたとしても、道理の上ではまったく害はなく、議論するのが間違っている。蘇東坡の雪堂が破壊され、紹興の初めに、黄州の一道士がみずから財産をなげうって再建し、何頡斯拳という知識人が上棟式の祝文を書いた。その一聯にいう、「前身は鶴と化し、かつて赤壁の遊びに従った。王羲之の故事にならない、鷺鳥と取り換えようにも、黄庭経を写すほどの字はない」。これは李太白の詩を典故に用いたもので、素晴らしい言葉と言える。思うに、張彦遠の『法書要録』に褚遂良の右軍書目を載せ、楷書に『黄庭経』があり、注に「六十行、山陰の道士に与える」と言っている。真筆がもたらあつたのである。また武平一の「徐氏法書記」に、「則天武后が太宗のときの法書六十余函を虫干しし、その中に黄庭経があつた」と言っている。また徐浩（字は季海）の「古蹟記」には、「玄宗のとき、王羲之の楷書三卷があり、黄庭経を第一とした」とある。みな『道德経』があつたとは言っていない。こうしてみると、意外にも『晋書』の伝記が誤りであることが分かる。

李太白詩云、「山陰道士如相見、応写黄庭換白鵝。」蓋用王逸少事也。前賢或議之曰、「逸少写道德経、道士拳鵝群以贈之。」元非黄庭、以為太白之誤。予謂太白眼高四海、衝口成章、必不規規然、旋檢閱晋史、看逸少伝、然後落筆。正使誤以道德為黄庭、於理正自無害、議之過矣。東坡雪堂既毀、紹興初、黄州一道士自捐錢粟再營建、士人何頡斯拳作上梁文、其一聯云、「前身化鶴、曾陪赤壁之遊。故事換鵝、無復黄庭之字。」乃用太白詩為出處、可謂奇語。案張彦遠法書要録、載褚遂良右軍書目、正書有黄庭経云、注、「六十行、与山陰道士」、真蹟故在。又武平一徐氏法書記云、「武后曝太宗時法書六十余函、有黄庭。」又徐季海古蹟記、「玄宗時、大王正書三卷、以黄庭為第一。」皆不云有道德経、則知乃晋伝誤也。

洪邁は、李白の作詩方法について述べ、たとえ典故を誤解しても、詩の内容には関係ない、と言っている。さらに、唐・張彦遠『法書要録』（卷三）、唐・武平一「徐氏法書記」（『法書要録』卷三）、唐・徐浩「古蹟記」（同上）を引いて、王羲之が『黄庭経』を写したことを証明し、『晋書』の伝記が誤っている、とまで言っている。なお、徐浩「古蹟記」に「以黄庭為第一」とあるのは、本文ではなく、注に見える言葉である。

王羲之が鶯鳥と取り換えたのは、『道德経』なのだろうか、それとも『黄庭経』なのだろうか。清・王琦の『李太白全集』の注を見ると、『王氏法書苑』を引いて、『黄庭経』を写して鶯鳥と取り換えた話と、『道德経』を写して鶯鳥と取り換えた話の二つがある、という説を紹介している。李白は「王右軍」（『李太白全集』卷二十二）と題する詩では、「掃素写道経、筆精妙入神」のように、王羲之が『道德経』を写して鶯鳥を手に入れたことを詠じている。つまり、李白は二つの話を区別して用いているのであり、誤解しているのではない、というのが『王氏法書苑』の意見である。こうなると、諸説紛々として、どれが本当か分からない。なお、『王氏法書苑』は、明・王世貞の『古今法書苑』（『中国书画全書』第五冊、上海书画出版社、二〇〇〇）を指し、右の説は、卷六十四・十三之石十「晋王逸少書黄庭経」に収められている。ただし、まったく同じ意見が、宋・張溥『雲谷雜記』卷一に見えるので、王世貞自身の見解ではなく、張溥の意見を採録したものだろう。

王琦の注では、ほかに宋・王楙『野客叢書』、宋・米芾（字は元章）『書史』、宋・黄伯思『東觀余論』を引く。また、みずからも『白氏六帖』、六朝宋・何法盛『晋中興書』（『太平御覽』卷三三八・職官部三十六・右將軍）、前蜀・杜光庭『仙伝拾遺』を引いて、王羲之が『黄庭経』を写して鶯鳥と取り換えた話があるので、李白の誤りではないことを論じている。結局、いろいろな説があり、『黄庭経』と言うものもあれば、『道德経』と言うものもある。道士の名前も、劉と言ったり、管と言ったりする。鶯鳥の数も、全部と言ったり、二羽と言ったりする。このような違いがなぜ起こるのか。王琦によれば、それは「伝聞異辞」のためである。つまり、伝聞に基づく話なので、言うことが異なる、という。したがって、ひとつの説を根拠に、李白が誤っているとしたり、『晋書』が誤っているとしたり、または二つの事柄であると言ったり、王羲之は『黄庭経』を写したことはないと言っ

たりするのは、みなひとつのことに執着して誤つたのだという。王琦は、このように述べた後で、すでに見た『容齋隨筆』の、李白は細かいことにこだわらずに詩を作るので、『道德経』を『黄庭経』と間違えたとしても、道理の上ではまったく害はない、という意見を引き、「夫詩之美劣、原不関乎用事之誤与否」、そもそも詩のよしあしは、本来典故を誤用したかどうかとは関係ない、と書いている。

王羲之が鶯鳥と取り換えたのは、『道德経』か『黄庭経』かという議論をいろいろ眺めてきた。その中で、王琦が「伝聞異辞」と言っているのに注意しよう。恐らく、王羲之鶯鳥説話というようなものが広く伝わり、様々な変容を加えながら、伝承されていったのではなからうか。したがって、基づく資料が異なれば、伝承が異なるのは当然である。どれが正しいか、という議論自体に意味がない。王琦がいうように、詩の価値は典故を誤用したかどうかで決まらない。洪邁は、誤用しても問題ない、と言っている。それは、「誤解する権利」〔鶴見俊輔〕誤解する権利』、筑摩書房、一九五九による）を認めるものにほかならない。ここには、詩は事実を写すものである、という文学観はない。事実を重んじる風潮の強かった宋代に、洪邁のような見方が存在したことを忘れてはならない。

三 絶句の誤字

詩人が典故を誤用しても問題はなく、詩人には誤解する権利がある、という見方について述べてきた。ここでは、読者の視点から、テキストの誤字について考察してみたい。明・楊慎『升菴詩話』巻八・唐詩絶句誤字で、次のように言っている。

唐詩の絶句は、今のテキストには誤字が多い。ひとつふたつ、例を挙げてみよう。例えば、杜牧之の江南春に、「十里 鶯啼いて 緑 紅に映ず」というのを、今のテキストは誤って「千里」に作っている。もし

俗本に従うと、「千里 鶯啼く」では、誰がうぐいすの声を聴き取れるだろう。「千里 緑 紅に映ず」では、誰にその景色が見えるだろう。もしも十里に作れば、うぐいすが鳴き、緑と紅の映える風景、町村と楼台、僧侶の寺と酒屋ののほり、みな視野の中にある。また「揚州の韓綽判官に寄す」に「秋尽きて江南 草未だ凋まず」というのを、俗本は「草木凋む」に作る。秋が終わって草木がしばむのは、当たり前前で、わざわざ言うまでのことはない。まして、江南の地は温暖で、草木がしばむことはない。この詩は、杜牧が淮南にいて揚州の人に寄せたもので、淮南の草木が枯れるのを嫌い、江南の繁華を羨んでいるのだろう。もし「草木凋む」に作れば、「青山明月」、「玉人吹簫」とひと組みにならない。この二つの詩は非常にすぐれているのに、「十里鶯啼」の「十」に俗人がひと払い加えて台無しにし、「草未凋」の「未」から俗人が一画減らして台無しにしてしまった、と私は遊び心に考えている。俗流知識人の救いよきのなさは、ひどいものだ。また、例えば陸龜蒙の「宮人斜」の詩に、「草は愁烟を着けて春ならざるに似たり」というのは、たった一句で、墳墓の凄惨なようすを表している。今のテキストは「草樹は烟のごとく春ならざるに似たり」に作っているが、「草樹は烟のごとし」というのはまさしく春の光景で、「春ならず」という字をどうして使えよう。読者がしばしばこういうことを軽視するのは、食べ物を食べても味が分からないようなものだ。

唐詩絶句、今本多誤字、試拏一二。如杜牧之江南春云「十里鶯啼緑映紅」、今本誤作「千里」。若依俗本、「千里鶯啼」、誰人聽得。「千里緑映紅」、誰人見得。若作十里、則鶯啼緑紅之景、村郭楼台、僧寺酒旗、皆在其中矣。又寄揚州韓綽判官云「秋尽江南草未凋」、俗本作「草木凋」。秋尽而草木凋、自是常事、不必説也。況江南地暖、草本不凋乎。此詩杜牧在淮南而寄揚州人者、蓋厭淮南之揺落、而羨江南之繁華、若作草木凋、則与「青山明月」、「玉人吹簫」不是一套事矣。余戲謂此二詩絶妙、「十里鶯啼」、俗人添一撇壞了、「草未凋」、俗人減一画壞了、甚矣、士俗不可医也。又如陸龜蒙宮人斜詩云「草着愁烟似不春」、只一句、便見墳墓凄惻之意。今本作「草樹如烟似不春」、「草樹如烟」、正是春景、如何下得「不春」字。読者往往忽之、亦食不知味者也。

楊慎は、唐詩の誤字の例を三つ挙げてゐる。一つ目は、杜牧の「江南春絶句」(『樊川文集』卷三)である。参考までに全体を示しておく。

千里鶯啼緑映紅 千里 鶯啼いて 緑 紅に映ず

水村山郭酒旗風 水村 山郭 酒旗の風

南朝四百八十寺 南朝 四百八十寺

多少樓台烟雨中 多少の樓台 烟雨の中

千里四方、鶯がさえずり、木々の緑が花の紅に照り映える。水辺の村でも山際の町でも、酒屋ののほりが風に揺れている。南朝の時代には、四百八十もの寺が建てられた。その名残の多くの樓台が霧雨の中にかすんでいる。

江南の春の景物を詠じた詩。楊慎によれば、「千」は「十」の誤りだという。千里では広すぎて、見たり聞いたりできない、というのがその理由である。だが、果たしてそうだろうか。清・何文煥「歴代詩話考索」(『歴代詩話』)では、楊慎の意見に反対して、次のように述べる。

私の考えでは、たとえ十里に作ったとしても、ことごとく聴き取り、見ることができるとは限らない。題に「江南春」というのは、江南は四方の広さが千里あり、千里の中に、うぐいすが鳴き緑が映えるのだ。水辺の村も山際の町も、酒屋ののほりがないとくところはなく、四百八十の寺では、樓台がほとんど霧雨の中にかすんでいる。この詩の内容は広範囲にわたるもので、一箇所だけを指すことはできない。だから、まとめて「江南春」という題をつけた。詩人は題のつけ方がうまい。

余謂即作十里、亦未必尽聽得著、看得見。題云「江南春」、江南方広千里、千里之中、鶯啼而綠映焉。水村山郭、無処無酒旗、四百八十寺、樓台多在烟雨中也。此詩之意既広、不得專指一処、故総而命曰「江南春」。詩家善立題者也。

「千里」が正しいという楊慎の意見は、合理性に基づいている。それに対して、合理性に基づくならば、「十里」でも不合理が生じる、というのが何文煥の主張である。そして、「江南春」という詩題に注目する。

横山伊勢雄『唐詩の鑑賞——珠玉の百首選——』（ぎょうせい、一九七八）では、「中唐の合理性とは異なる詩的眞実の継承化こそが晚唐詩の特質なのである」「杜牧はこの詩において、江南の春を、自然と文物の二点において典型化したのであると私は見たい」（三四七頁）と述べている。「詩的眞実」「典型化」という観点に立てば、杜牧の詩には何の矛盾もない。

二つ目の詩は、杜牧の「寄揚州韓綽判官」（『樊川文集』卷四）である。全体を示せば、次のようになる。

青山隱隱水遙遙 青山隱隱として 水遙遙たり

秋尽江南草木凋 秋尽きて江南 草木凋む

二十四橋明月夜 二十四橋 明月の夜

玉人何処教吹簫 玉人 何れの処にか吹簫を教うる

青い山はかすみ、水は遠くまで流れる。秋が終わり、江南の草木も枯れたことだろう。二十四橋に明月の輝く夜。高貴な人は、どこで簫の吹き方を教えているのか。

揚州にいる韓綽に宛てた詩。二十四橋は、揚州城の内外にかかる橋。玉人は、美しい人。ここは、韓綽を指す。杜牧は、三十一歳から約二年間、揚州で過ごしている。揚州は、水路が縦横に走り、温暖で風光明媚、歓楽街と

しても知られる。杜牧は、韓綽が揚州で風流な生活を送っているのを羨んでいる。

右の詩の第二句、「草木凋」は「草未凋」の誤りである、というのが楊慎の意見である。その理由として、「草木凋む」では当然すぎることと、「青山明月」「玉人吹簫」と調和しないことを挙げている。だが、逆の見方もできる。温暖といわれる揚州でさえ、秋が終われば草木が枯れる、寂しい風景と対比することによって、「二十四橋」「明月」「玉人」「吹簫」の語が表わす風流の世界がかえって引き立ち、杜牧の羨望が一層強まることになる。そもそも、楊慎がどこまで本気で議論しているか疑わしい。「十」に払いを加えれば「千」になり、「末」から一画減らせれば「木」になる、文字遊びの面白さを言ってみただけのことかも知れない。

三つ目の例は、陸龜蒙の「宮人斜」『唐甫里先生文集』巻十二で、次のような詩である。宮人斜は、宮女の墓をいう。

草着愁煙似不春	草は愁煙を着け	春ならざるに似たり
晚鶯哀怨問行人	晚鶯 哀怨して	行人に問う
須知一種埋香骨	須く知るべし 一種	香骨を埋むるも
猶勝昭君作虜塵	猶お昭君の虜塵と作るに勝ると	

草は愁いを帯びたもやに包まれて、春ではないようだ。晩春のうぐいすが、哀しく怨むような声で旅人に尋ねている。一樣に美人の骨を埋められても、王昭君が異民族の地に葬られたよりはましと知るべきである。

宮女の墓のさびれたようすを歌う。宮人斜を詠じた詩については、詹滿江『李商隱研究』第一部第四章（汲古書院、二〇〇五）を参照。楊慎によれば、第一句が、「草樹如烟似不春」となっているテキストがあり、「草樹如烟」は春の光景なので、「不春」と矛盾するという。だが、その場合にも、春は訪れたけれども、宮女の墓地だけは春を感じられない、と解釈すれば、矛盾は解消される。詩の読み方はいろいろある。

唐詩の絶句に見られる誤字について検討した。誤字というけれども、どれが正しい字なのかは結局分からない。読者の数だけ解釈がある。周裕鍇『中国古代阐释学研究』（上海人民出版社、二〇〇三）は、宋・羅大経『鶴林玉露』乙編卷二「春風花草」を引いて、「誤解」に独創的な価値があることを認めている（二五八頁）。読者にも「誤解する権利」がある、と言ってよいだろう。いや、「誤解する権利」こそ、文学の本質にほかならない。

四 誤解か正解か——文学批評としての『東坡烏台詩案』

これまで、誤解ということについて考察してきた。そもそも、詩の解釈に正解があるのだろうか。最後に、宋・朋九万『東坡烏台詩案』（叢書集成初編）を取り上げて考えてみよう。

元豊二年（一〇七九）、湖州（浙江省湖州市）知事の任にあった蘇軾（号は、東坡居士）は、朝廷を誹謗する詩文を書いたという理由で逮捕され、御史台（烏台）の牢獄につながれた。証拠の詩文に基づき、諷刺の意図に闕して蔽しい尋問を受けた。蘇軾は、はじめ諷刺の意図はないと主張したが、結局罪を認めた。このときの裁判の記録が、『東坡烏台詩案』である。検察官の弾劾文、蘇軾の供述書、判決文などが収められている。近藤一成「東坡の犯罪——『烏台詩案』の基礎的考察——」（『東方学会創立五十周年記念東方学論集』、一九九七）を参照。

告発の対象となった詩をひとつ引用する。「送蔡冠卿知饒州」（清・馮应榴輯注『蘇軾詩集合注』卷七、上海古籍出版社、二〇〇一）。蔡冠卿は、大理寺少卿（司法官）として殺人事件を担当したとき、王安石と対立し、饒州（江西省鄱陽県）の知事に出された。饒州に赴任する蔡冠卿を送別する詩である。

1 吾観蔡子与人遊 吾蔡子の人と遊ぶを観るに

掀脰笑語無不可 掀脰 笑語 可ならざる無し

平生儻蕩不驚俗

平生 儻蕩として俗を驚かさず

臨事迂闊乃過我

事に臨みて迂闊なること乃ち我に過ぐ

5 横前坑奔衆所畏

前に横たわる坑奔は衆の畏るる所

布路金珠誰不裹

路に布く金珠は誰か裹つつまざらん

爾來變化驚何速

爾來 變化 何ぞ速やかなるに驚く

昔号剛強今亦頗

昔剛強と号し 今亦頗なり

憐君独守廷尉法

憐れむ 君が独り廷尉の法を守り

10 晚歲却理鄱陽柂

晚歲 却つて鄱陽の柂を理とらむるを

莫嗟天驥逐羸牛

嗟く莫れ 天驥の羸牛を逐おうを

欲試良玉須猛火

良玉を試みんと欲せば猛火を須もう

世事徐觀真夢寐

世事 徐ろに觀れば真に夢寐なり

人生不信長軼軻

人生 信ぜず 長に軼軻なるを

15 知君決獄有陰功

知る 君の獄を決して陰功有るを

他日老人酬魏顛

他日 老人 魏顛に酬いん

蔡さんの交遊關係を見ると、にぎやかな笑いで誰とでも仲良くなる。ふだんはものにこだわらず、世俗を驚かすこともない。仕事にあたると、世事にうといことは私以上だ。前に仕掛けた落とし穴は、みなが恐れる。道にばらまかれた黄金や真珠を拾わないものはない。あれ以来、急速な変化は驚くばかりだ。昔は強いと言われても、今はかたよっている。ああ、あなただけは公正な裁判の方法を守り、晩年になって、鄱陽に流された。千里の馬が、疲れた牛の後からついて行くのを嘆いてはいけない。猛火に鍛えられてこそ、美玉であることを証明する。世の中の仕事は、静かに觀察すれば、夢を見ているのと同じだ。人として一生不遇ということとは信じられない。あなたの判決には、人に知られない善行があるのを知っている。いつか魏顛の

善行に報いる老人が現われるだろう。

魏顥は、春秋時代の晋の人で、魏武子の子。『春秋左氏伝』宣公十三年に、次のような話がある。魏武子には気入りのめかけがいて、子供がなかった。魏武子が病気になる、めかけを嫁がせよ、と魏顥に命じた。病気が重くなると、めかけを殉死させよ、と魏顥に命じた。魏武子が亡くなり、魏顥は、めかけを嫁がせた。病気が重くなると心が乱れるので、正常なときの指示に従ったのである。その後、秦と戦争になり、老人が草を結んで杜回という力持ちをつまづかせたので、これを捕えた。夜の夢に、この老人が現われ、魏顥が命を救っためかけの父親であることを告げた。老人は恩返しに、魏顥の敵を倒したのである。よい行いをすれば、よい報いがある、という話。蘇軾は、蔡冠卿を魏顥になぞらえて、いつかは報われる日が来ると慰めたのである。

なお、『東坡烏台詩案』では、第二句の「厖」は「逐」、第七句の「爾」は「邇」、第十四句の「轆軻」は「坎圻」になっている。右の詩に関する蘇軾の供述書は、次のようなものである。「云々」の箇所は、詩の本文を引いている。

一、熙寧五年二月のうちに、大理少卿蔡冠卿は、詔勅により知事として饒州に派遣された。軾は詩を作り、送別して言った、「云々」と。諷刺の意図のないものを除いて言えば、「前に横たわる坑穽は衆の畏るる所」（第五句）というのは、当時の朝廷の権力者が、その意向に逆らう者があれば、落とし穴を設けて陥れたことをそしっている。また、「路に布く金珠は誰か裹まざらん」（第六句）というのは、朝廷の権力者が、その意向に従う者があれば、黄金や真珠を道にばらまくように、利益で誘惑したことを諷刺している。「邇来変化 何ぞ速やかなるに驚く、昔剛強と号し 今亦頗なり」（第七・八句）というのは、知識人が利益による誘惑と脅迫に負けて、態度を変え、昔は強いと言われたのに、今はそうでないことをそしっている。また、「憐れむ 君が独り廷尉の法を守り」（第九句）というのは、蔡冠卿がしばしば朝廷と刑法について議論し

たために、登用されることなく、かえって小さな郡の知事に出されたことを言っている。また、「嗟く莫れ天驥の羸牛を逐うを」(第十一句)というのは、軾が、蔡冠卿を千里の馬にたとえ、登用された才能のない人物を弱い牛にたとえた。軾は、朝廷に登用された人物が不适当であることを諷刺したつもりである。また、「良玉を試みると欲せば猛火を須う」(第十二句)というのは、美玉は火に焼かれても変わらないからよいこと、つまり、蔡冠卿が困難や挫折を経験しても、美玉のように、節操を改めないことを言っている。また、「世事 徐ろに觀れば真に夢寐なり、人生 信ぜず 長に坎珂なるを」(第十三・十四句)というのは、蔡冠卿がしばしば朝廷と刑法を議論したために、登用されなかったこと、人が成功するか失敗するかは、古来夢まぼろしのようなもので、時の権力者が必ずつねに前進するとは限らず、蔡冠卿でもつねに後退するとは限らないことを言っている。だから、「人生 信ぜず 長に坎珂なるを」というのである。その詩は、証拠資料の冊子に関わるものである。

一熙寧五年二月内、大理少卿蔡冠卿、准勅差知饒州。軾作詩送之曰、「云々」。除無譏諷外、云横前坑窞衆所畏、以譏當時朝廷用事之人、有逆其意者、則設坑窞以陷之也。又云、布路金珠誰不裹、以譏諷朝廷用事之人、有順其意者、則以利誘之、如金珠布路也。夫云邇來變化驚何速、昔号剛強今亦頗、以譏士大夫為利所誘脅、變化以從之、雖旧号剛強、今亦然也。又云、憐君独守廷尉法、言冠卿屢与朝廷爭議刑法、以致不進用、却出守小郡也。又云、莫嗟天驥逐羸牛、軾以冠卿比天驥、以進用不才比羸牛、軾意以譏諷朝廷進用之人不当也。又云、欲試良玉須猛火、良玉經火不變、然後為良、言冠卿經歷艱阻挫折、節操不改、如良玉也。又云、世事徐觀真夢寐、人生不信長坎珂、為冠卿屢与朝廷爭議刑法、致不進用、言人事得喪、古來譬如夢幻、當時執政、必不常進、冠卿亦不常退、故云人生不信長坎珂也。其詩係冊子内。

なお、「雖旧号剛強、今亦然也」とあるのは分かりにくい。「然」は「不然」の誤りと見なしておく。証拠資料の冊子とは、御史台が提出した蘇軾の詩文集、『元豐統添蘇子瞻学士錢塘集』を指す。この供述書が書かれるま

で、検察官と蘇軾の間で、詩の解釈をめぐる議論が交わされたに違いない。検察官が尋問し、それに対して、蘇軾が反論する。または、その通りだと認める。したがって、供述書を書いたのは、蘇軾自身だとしても、その内容はあらかじめ検察官によって準備されたものと考えてよい。つまり、蘇軾の詩の解釈は、検察官の解釈にほかならない。

蘇軾の供述書は、裁判の記録としては、まことに異様なものである。右の文章を読んで、誰が裁判の記録と思おうだろう。「其詩係冊子内」という言葉を除けば、宋代の詩話とまったく変わらない。実際、宋・陳振孫『直齋書錄解題』巻十一によれば、「烏台詩話十三卷 蜀人、朋九万録」とあり、詩話としても刊行されたことが分かる。さらに、宋・胡仔『苕溪漁隱叢話』前集巻四十二、四十五にも、蘇軾の供述書が引かれている。宋代には、詩話が流行した。蘇軾の裁判と詩話の流行とは、恐らく無関係ではない。法廷で詩の解釈をめぐる議論するという前代未聞の裁判は、詩話の流行を背景としてはじめて理解できるのではなからうか。蘇軾の詩について尋問した検察官は、文学批評家でもあった。蘇軾の詩の愛読者でさえあったかも知れない。蘇軾の詩を解釈することに、異常な情熱を傾けている。『東坡烏台詩案』は、裁判の名前を借りた文学批評と言ってもよい。結局、蘇軾の詩は、裁判で弾劾されることによって、諷刺の目的を達したのである。裁判官が蘇軾の名声を高めることに協力した、という見方もできよう。

『東坡烏台詩案』は、蘇軾詩集の注釈にも採用されている。蘇軾の詩を解釈する重要な参考書である。裁判の結果、蘇軾の詩に諷刺の意図があることが認められた。もしも、蘇軾が裁判にかけられなかったとしたら、果たして、『東坡烏台詩案』に収められた蘇軾の詩は、どのように解釈されたのだろうか。諷刺の意図を持たない作品として、世の中に通用したのだろうか。『東坡烏台詩案』の解釈が正解だとすれば、それは誤解ということになる。ただし、もしも裁判がなければという仮定の話で、その場合、正解はないのだから、誤解という概念は成立しない。誤解が、正解ということになる。

蘇軾の詩の解釈が裁判で争われたということは、詩にはいろいろな解釈ができる、ということを公的な場で認

めたことにほかならない。唯一の正解はない、と言っているのと同じである。つまり、誤解も正解のひとつなのである。

詩の解釈において、すべての誤解は正解である。

(付記) 本稿は、平成十九年度人文社会科学部研究科プロジェクト研究(専攻プロジェクト)「中国における誤解の詩学」の研究成果である。